

歴史地理学会と私

青木 栄一



1. 歴史地理学会入会のいきさつ

編集委員会より学会の創立50周年に因んで、初期の学会についての回想記を書くようにと依頼された。歴史地理学会は1958（昭和33）年4月に発足しているが、私はこれにはまったくかわかっていない。当時の私は大学院修士課程の2年生であり、創立の中心となられた菊地利夫先生には千葉大学の学部生時代に直接の薫陶を受けていたし、創生期の学会運営に携われた多くの先生方を存知あげてはいたが、この学会が私の専門領域とかかわりがあるとは思っていなかった。それは当時の歴史地理学を私は近世以前の現象を地理学的に研究する学問と考えていたからで、私が研究を進めていた近代交通機関が歴史地理学の研究対象になるとは思ってもしなかった。当時の私は歴史的な流れのなかで鉄道や沿線地域社会の発達・変容を研究していたのであるが、それが歴史地理学の対象となる分野であったことには気付いてはいなかった。

1968（昭和43）年の1月か2月のことであったと思う。浅香幸雄先生（当時、歴史地理学会会長、東京教育大学教授）から突然電話をいただいた。4月に予定されている大会で発表せよという「ご命令」であった。私は会員でないと答えると、「だから入れ」ということになって、入会を約束付けられた。多分、そのときの発表申し込み者が少なく、要求に応じてすぐに発表できるような材料をもっていそうな若手の何人かに連絡をしたの

ではなかろうか。というわけで、私の場合は自分の意思というよりも、半ば強制的に入会ということになったのであった。

同年4月5日、法政大学で開催された第11回大会で「第一次産業地域における地方鉄道の建設」と題する発表をした。これはこのときの共同課題が「生産の歴史地理—とくに第一次産業を中心として—」だったからである。そのときの一連の発表テーマを見て、自分のやっている鉄道交通の研究も歴史地理学の中に位置づけることが出来るのではないかと感じた。

2. 喜多村俊夫先生の言葉

—技術史の重要性—

この第11回大会で、私は強烈な印象を受けた。共同課題に発表された全部で10編のうちの最後が喜多村俊夫先生の「近世における灌漑思想の発展とその地域性」であった。発表後の質疑応答で喜多村先生は「灌漑思想の理解には灌漑技術の理解が不可欠である。今の地理学者にはこの技術をきちんと勉強する覚悟があるのだろうか」と発言された。当時の私は交通地理学者が近代交通の技術とその発展にまったく関心を払わない姿勢に大きな疑問を感じていた。まさに各時代時代の技術とその歴史的発展を理解することなしには、灌漑も交通もその発展の理解ができないことは自明の理であるが、地理学の世界で技術史の必要性を主張することははばかられる雰囲気が存在していた。このときの喜多村先生の言葉こそ、その後の私の研究姿勢に大きな支えとなった。

同時に産業革命以後の近代技術史は、近世の技術よりもはるかに複雑であり、その理解

にはより多くの深い勉強を必要とする。このような研究姿勢がその後の地理学で十分に認識されたかどうかについては、まだまだ疑問の点もあるが、少なくとも私の研究の視点を支える重要な基盤となったことは確かである。そしてそれは後年私が産業遺産（近代化遺産）の研究にも関わるようになることにも繋がる考え方であった。

喜多村先生とはその後何度かお目にかかる機会はあったが、あまり詳しいお話をしたことはない。今思うと少し残念な気もするが、歴史地理学会が入会早々の私に与えた強力なインパクトであった。

私はすでに千葉大学で菊地利夫先生の授業をいくつか受け、他学部の行事であったにもかかわらず、先生と白浜兵三先生がご一緒に行っていた千葉県内の課外巡検にかなり多く参加しており、菊地先生から実は日本における治水・灌漑の歴史について多くの事実をすでに学んでいた。喜多村先生と菊地先生のお二人から教えられた治水と灌漑の歴史を総合して農村を理解する機会があったことは、歴史地理学会はまことによき出会いの場であったと思っている。

3. 藤岡謙二郎先生との出会い

1973（昭和48）年4月、東京学芸大学で開催された第16回大会において、ずいぶん大それたテーマをよく生意気にもやったと今では思うのであるが、私は「交通における歴史地理学の系譜」という発表をした。そのときの共同課題は「交通の歴史地理」であったから、本来は大先生が全体のまとめとしてやるべきものであって、私ごときチンピラが

やるべき発表ではなかったのである。

その質疑応答の時間で藤岡謙二郎先生から強烈なパンチを食らった。室賀信夫先生の著作が完全に抜けているのはどうしたわけか、というのである。正直のところしまったと思った。何しろそれまで鉄道を中心とする近代交通を研究対象としていたのが、「交通における歴史地理学」という大風呂敷を掲げ、一気に全時代に戦線を拡大してまことに大雑把な研究系譜を披露したのだから、いたるところに脱漏があって、藤岡先生ならずとも一言なかるべからず、と思われたのではないだろうか。

しかし、これが機縁となって、藤岡先生やその門下の同じ世代の歴史地理学者たちとその後長くお付き合いをすることになった。早世を惜しまれている小林健太郎、足利健亮のお二人とはとくに親しくしていただいた。藤岡先生の主宰するFHG（野外歴史地理学研究会）にも入会し、しばしば巡検に参加して関西の豊富な歴史地理的景観に触れる機会を持ったことは、私の研究にも大きな糧となった。

どうも個人的な体験ばかりの回想になってしまった。鉄道交通だけに特化していると地理学界一般から思われている私であるが、歴史地理学会のなかでのさまざまなお付き合いとその雰囲気は私の地理学の基礎教養における深化と拡大に絶大な貢献をしてくれたのであって、感謝しなければならぬと思っている。

（元会長）